

蜂災害防止対策の実践と効果 の検証 一第2報一 (919)

藤里営林署・藤琴森林事務所 斉藤 勝治

はじめに

近年蜂災害によって、死亡する事例が、全国的に多くなっていることから、昨年業務研究発表において、その対策と実践効果について、発表したところでありました。私達が日常の仕事をする上で、不安の無い安全な環境の中での作業でありたいと願い、署、現場一体となった中で、安全意識の高揚が図られるよう、1人ひとりの注意力と、職場全体の綿密な意思の疎通を図りながら、安全作業に取り組んで参りました。その結果、我が署においては、無災害も3年半となり、蜂災害についても、成果を上げることができたと考えております。今回は昨年につき、蜂災害防止対策として、秋田局管内28署の106森林事務所における取り組み状況について、アンケート調査を行い、その実施状況と成果について集約し我が署の実態と比較分析しながら、より効果の高い対策を探ってみましたので発表します。このことが参考となり今後山林で作業するにあたり蜂災害の不安が解消され作業効率が図られるならば幸いであります。以下調査項目は、設置時期、設置数、見廻り間隔外14項目について実施しました。

1 捕殺器の設置時期と見廻り間隔による捕殺状況について

昨年より蜂の捕殺器を早期に設置するよう局の指導がありましたが、各森林事務所の実施結果は5月下旬まで74%が完了しており、指導がほぼ守られている状況にありますが、数ヶ所で7月以降に実施しているところもあり、一考を要する現場もあります。また設置数であります。森林事務所管内で10~19ヶ所が37%と最も多く20~29ヶ所、1~9ヶ所が各19%と全体的には30ヶ所未満が8割程度であり、1日で見廻りできる設置数ではないかと考えます。中には80ヶ所以上の設置現場もあり、多く設置することには、それだけ効果も大きいのではないかと考えます。〔参照図表 表1、表2、表3、表4〕

見廻り間隔についてみますと、1週間おきが13%、2週間のあいだに1回見廻るといふ現場が59%であり一部にバラツキもありますが、大半は適切と思ひます、このことについては、昨年の発表で、2週間以上放置しておくとも薬液が蒸発し、また香りも薄らぐことから捕殺効果が期待できないということが明らかであります。

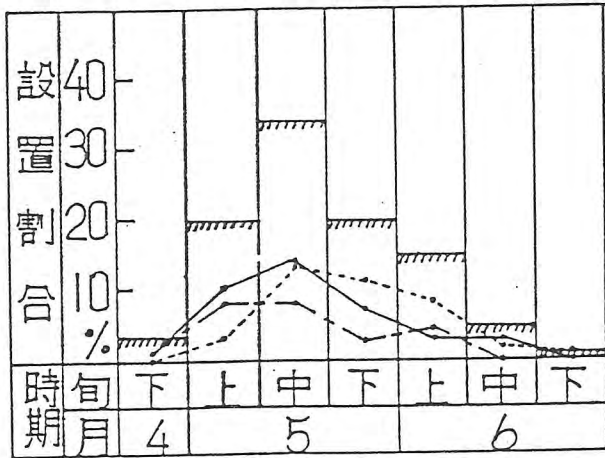


表1 捕殺器の設置時期

凡例

- ▨ 全体
- 北秋
- - 南秋
- · - 山形

以下同じ 割合等は全て回答事務所数106で除したもの

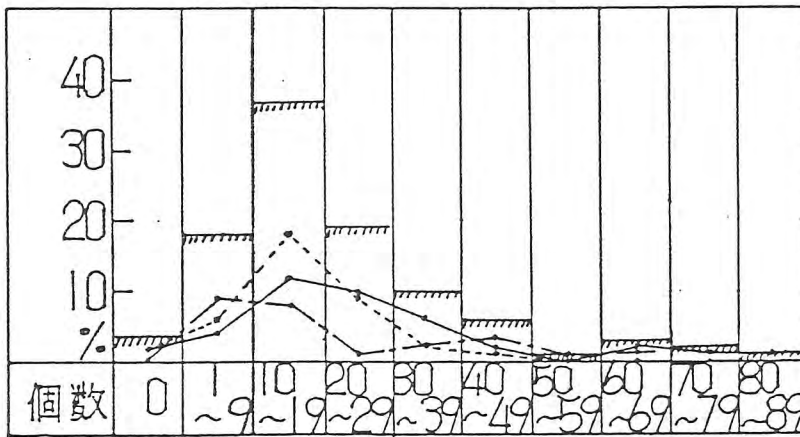


表2 捕殺器の設置数

平均数	北秋	南秋	山形	全体
個	23	21	15	19

表2-2 捕殺器の設置数

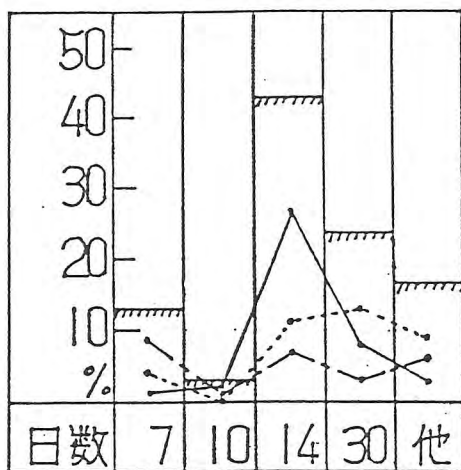


表3 捕殺器の見廻り間隔

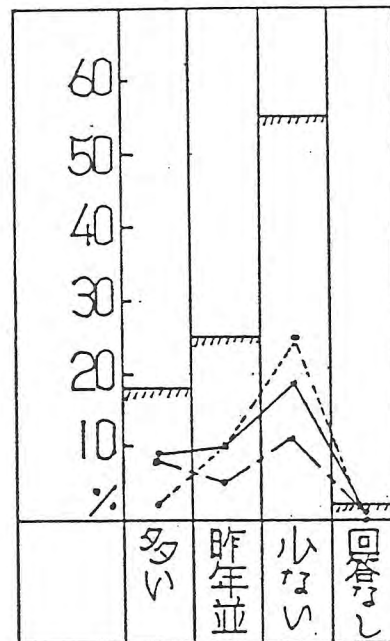


表4 捕殺数(前年比)

中には1ヶ月以上放置されている現場が41%もあり、せっかく早期にしかも多く設置したにもかかわらず効果が上がっていないということが、その現場の捕殺数にも明らかに表われて来ております。一例を上げますと5月中に60ヶ所設置したが、見廻りが1ヶ月以上であったため効果が表われていないところもあります。また良い例として4月下旬に20ヶ所設置して、一週間の見廻り間隔で大きな効果を上げている現場もあります。設置後の見廻り回数を、2週間程度の中でこまめに行い薬液を補充することが、いかに蜂の捕殺に重要であるかがわかつています。

2 今年の蜂の生息状況について

今年は入梅時期の降雨日が例年に比べ少なかったことから、蜂の生息数が多くなったと考えますが、アンケート調査の結果生息状況及び捕殺された蜂の数も、前年より少なかったという現場が半数以上を占めております。その理由としては各現場とも早期に捕殺器を設置した効果が表われているということが裏付けられます。また、このことについて請負事業者の数業者からも聞き取りしたところ国有林ではあまり蜂を見かけないが、民有林では例年のごとく多いということを知っておりこのことから、これまでの捕殺器の設置による効果が表われつつあることが伺い知れます。

[参照図表 表5、表6]

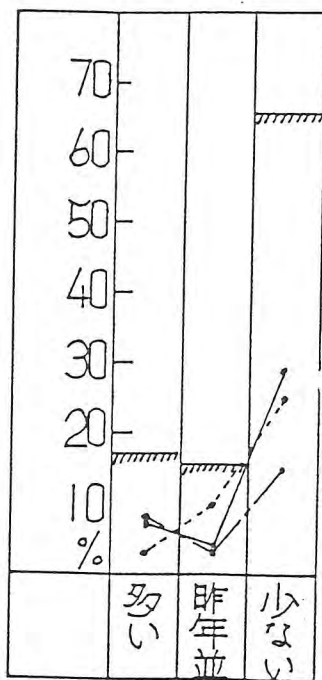


表5 生息状況
(前年比)

	発生件数	疾病件数
2年度	456	121
3年度	380	112
4年度	277	115
計	1,113	348

表6 年度別蜂刺れ件数

また昨年の発表で今後の課題となった「蜂がどのようなところに多く生息するのか」その実態が解明できれば、その対策も効果的にできるのではないかとということでアンケートを集約しました。その結果峰や沢筋よりも中腹が一番多く次に沢筋となっております。早春における女王蜂（一匹）の巣作り条件としては、雪消えの早い林道上部の法面や幼齢造林木の下葉などに営巣することが多く見受けられております。一番多く捕殺された月は6月となっておりますが、できるだけ早期に捕殺器を設置し、蜂が増える前に捕殺するという、当初の目的は各署とも達成できているのではないかと考えられますし、これまでは小蜂が入らないという報告がなされておりましたが、小蜂も入っているという現場が半数以上となっております認識を改めました。〔参照図表 表7、表8、表9〕

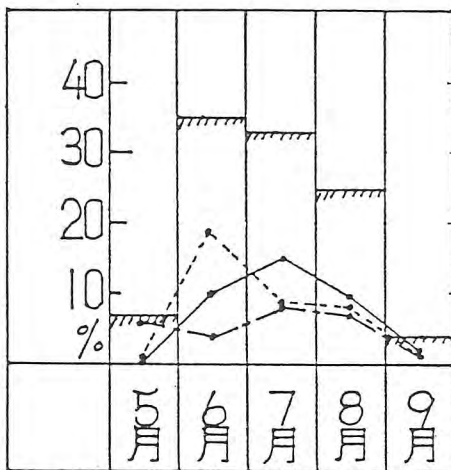


表7 多く捕殺された時期

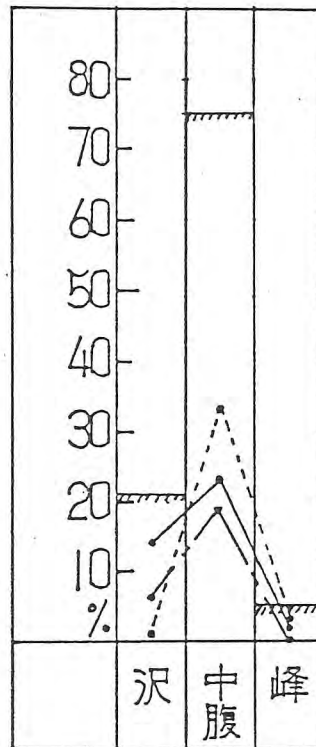


表8 多かった場所

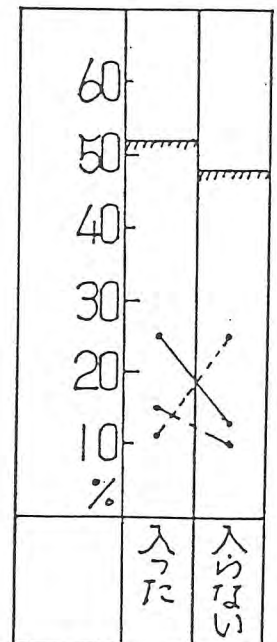


表9 小さい蜂

3 これまでの局指導（事前見廻り）についての実施状況と効果について
 昨年の発表では、事前見廻りは労多くして効果が少ないということを申し上げてまいりました。この点についての集約結果では、「効果がある」というのがわずか10%であり、その必要性についても15%と少なく、各現場のとらえ方としては、

事前見廻りが効果的であるという指導については見直しの検討が必要であると考えられます。また指導どおりの「事前見廻りを確実に実施しているか」との問いにも「実施している」と答えたのは9%と少なく「やれない」「ケースバイケース」と答えたのがほとんどで、指導どおりにはほとんど実施されていないという実態にあります。それでは蜂対策として「どのような点に力を入れ実施しているか」であります「早期に捕殺器を設置する」その効果が大であると答えたのは80%となっておりますし、昨年指導された「早期に捕殺器の設置」についても80%以上が良いとなっております、これまでの「事前見廻り」については各現場とも効果が少ないと受け止めており、取り組む姿勢に積極性が見られないのが現状であることが明らかになりました。 [参照図表 表10、表11、表12]

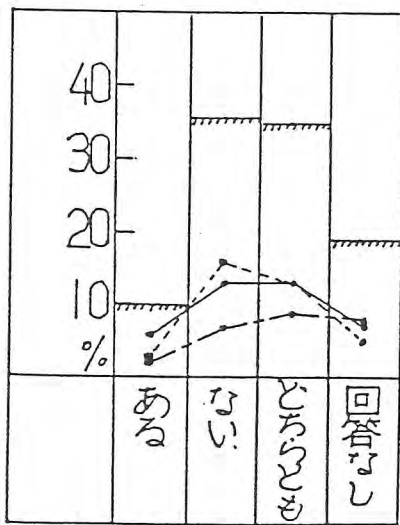


表10 局指導の効果

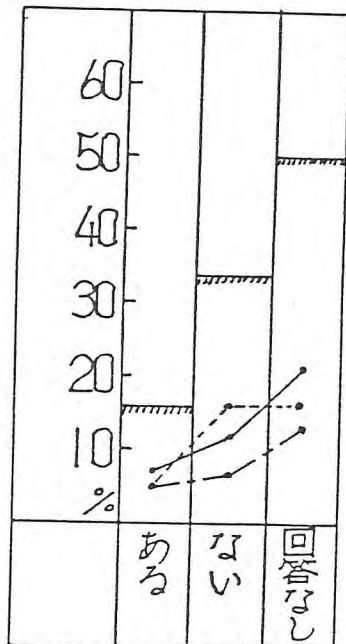


表11 局指導の必要性

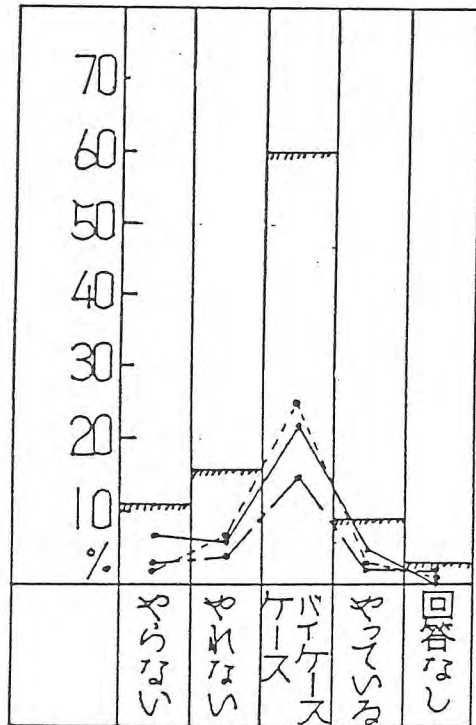


表12 局指導の実行性

4 平成4年度における当署の取り組みについて

我が署における取り組みを基本に、より効果を高めるためには、

- (1) 捕殺器の早期設置の時期を4月下旬とする。
- (2) 見廻りの周期は一週間に1回とする。
- (3) 薬液はこれまでと同じように酒、酢、砂糖、ジュース（主に葡萄）とするこ
とで取り組みました。

今年度の設置流域4流域、設置箇所20ヶ所で検証しました。その結果、蜂が捕殺器に初めて入ったのが5月8日その日以降最終見廻りの10月22日まで28回の見廻りをしました。延べ捕獲数は770匹であり、オオガタスズメバチ202匹コガタスズメバチ458匹とスズメバチ種が捕獲数約70%を示しているところでもあります。(オオガタスズメバチ最大体長4.6cmでありました。)なお小型のアシナガバチ(フタモン、キイロの二種)類も7月になると入り始めております。9月中旬以降にもある程度の捕獲がされました。秋ぐちに越冬のため巣から離れた蜂を捕獲することは次年度の個体数の減少につながる大きな要素と考えられ今後注意深く取り組むことが重要であります。 [参照図表 表13]

	オオガタ スズメ	コガタ スズメ	フタモン アシナガ	キイロ アシナガ	クロ スズメ	計
5月	25	30				55
6月	83	168	2		7	260
7月	37	99	15			151
8月	33	97	19			149
9月	18	43	14	22		97
10月	6	21	23	8		58
計	202	458	73	30	7	770

表13 藤琴森林事務所の月別蜂種別捕殺数

5 反省と今後の課題

今回実施したアンケート調査から、各森林事務所の蜂刺され防止対策としての取り組み状況が明らかになったわけですが「早期の捕獲器設置による捕獲効果」も認められ、蜂災害防止対策としてその体制が確立されつつありますが先に述べたとおりその実施状況はまちまちであります。このことから①設置時期②設置箇所数③設

置場所④薬液⑤見廻り間隔等具体的に統一した指導が必要と思います。また、これまでの蜂災害防止対策の基本的重点実施事項として位置付けされ指導されてきた「事前見廻り」についても、各現場ともその効果を認めておらず現実実態としては実施されていないという状況下であり、「防止対策」をなしていないという反省すべき事項であると思います。蜂の生態・生息状況はまだ全て解明できるところまで至っていないにしても各現場ともに「早期に設置することによる捕殺効果」が認められており今後とも防止対策として取り組んでいきたいという集約からも安全対策の基本である「安全の先取り」という位置付けで今後とも続けて行くことが最も重要であると考えられます。

6 まとめ

捕殺器の早期設置の目的は「巣作り前の女王蜂を捕獲すること」で蜂の集団を作らせないことにより作業現場から危険要素を除去するということですが、調査結果からして各現場の取り組みは積極的な姿勢が見受けられました。これまでの「事前見廻り」が生かされていない事実もわかりました。このことが蜂災害が後を絶たない結果に結び付いているとするならば、早期に捕殺器を設置することにより、労少なく効果が極めて大きいと認められる「蜂営巣絶滅作戦」が、現在ではなによりの対応策であります。今後「蜂営巣絶滅作戦」を進めるに当たって大事なことは薬液の補充交換に十分気を遣うことでもあります。このことが、蜂の個体数を減少させることによって仕事に注意力を集中させ、災害のない明るい職場づくりに邁進できるものと確信致しております。

この発表を集約するに当たり、アンケートに協力戴いた、森林事務所の担当者に厚くお礼を申し上げます。今後は蜂刺され災害が皆無となるよう、各現場の取り組みに期待し発表を終わることと致します。